

〈学科10周年企画「地域構想学」を求めて〉

地域構想の本願 — 一周遅れのトップランナー

金菱 清

東北学院大学教養学部地域構想学科

宮崎県日向の山岳地帯に諸塚という小さな村がある。ここで新しい神社の奉納として、神楽（かぐら）の舞いが披露された。観光用ではなく、あくまで純粋に村の神事である。大神楽は、宮遷宮やお日待ちの願成就といった特別の時にしか奉納されないもので、普段の例祭の際には神楽自体が縮小された形でおこなわれる。しかし、今回は全ての神楽が舞われる。その時間はなんと朝の10時に始まり、翌朝の8時まで途切れることなく、まる1日もかかる。いつもは寝たきりのおじいさんも、このときとばかりに起き上がって、驚くほど元気に動きまわる。医学的にはとても説明のできないことである。

この事実「地域構想」が求める核心がある。私たちが選択してきた近代化およびそれを支える科学は、要素に分けて、分かりやすい（ところだけを切り出して）因果関係で取り結んできた。しかし、地域で生活をしている人々にとって、「福祉」だけで生きているのではない。「健康（スポーツ）」「○○」だけで生きているのではない。つまり専門分野で生きているわけではない。その意味で、地域の生活こそが要素に分けても本来的には意味がないという点で全体的であり、またおのおの生活は本質的に異なっているという点で個別的であり、さらにいうまでもなく主観的なものである。地域構想が複眼的な視野から成り立っている所以である。

祭りで高齢者の人がむくと起き上がってくるのも、日常のごく一部を切り出して福祉の対象としただけでは、なぜ祭りの際に高齢者が元気になるのか説明がつかない。地域における役割から考えれば、労働生産の場で片隅に追いやられていた高齢者が物語の中心に踊りでる。いわば、人々の地域生活の軌軸は究極のところ過去から累積された知から成り立っているといえる。ともあれ、地域構想は本質論でありながら、近代化からいえばとてもマイナーな路線である。それゆえ、人々に浸透するためにしば

しの時間を必要とする。

祭りが執り行われた時期は、2月の末ということもあり、しんと雪が降りしきる。零下のなか素足で外の舞台を踏みしめながら、白装束をまとい舞い踊る。太鼓に合わせた息遣いが夜空を白く染めてゆく。こんもりとした丘に何百年ともに生きてきたであろう大木が、村を見渡すように一本どしりと腰を据えて構えている。八百万の神々を巫女に迎え、延々と舞い続ける。

舞うことは、文字通り回る行為をさす。まわる行為はどの国においてもひとつの神聖さを示す身体的な技法である。ある人いわく、「神楽は、喜びや祈願事のあるときに、集団でそれを表現するための、身体にしみついた“型”」である。ある集団の様式に帰一させることによって自分が生かされる。その意味において芸術は、今私たちが暮らす都市においての、たんなる一分野としての芸術ではなく、もっと根本的に生活や文学や音楽など一切切が含まれたものが踊りに溶け込んでいるものである。

近代の芸術は、このことに大きな意義を認めていない。それは背景にある思想が真っ向から対立しているからである。近代は一人一人の人間をかけがえのない存在として価値を認め、スポットライトをあてようとしてきた。結果、自分が一個の独立した芸術家となることを求められ、それを誇りとさえ思った。自己を際立てようとする意志は、そうした過去・未来・神々や人々との有機的なつながりをますます希薄にし、人間が介在しない芸術作品を生み出すこととなった。

その対極として、桂の神楽がある。そこでは決して個人としてのサインや名前などはない。にもかかわらず、それぞれひとりびとりが実に生き生きしている。かつ個性や独自性があり、そのことが振りのひとつひとつ、指先の伸ばし方、足の運びによって表れる。満点の星が輝く漆黒の闇夜のキャンバスに

吐く人の白息は、まるで靈魂のようにつややかに輝き、ひとつの鼓動となる。まさにここで親々の先祖が生き返っているのである。

かつて日本各地をくまなくめぐった民俗学者の宮本常一は、講演のなかで次のように述べている。「地域社会が生き生きとしている社会が、いちばん望ましい社会ではないかと私は思っておるのです」。その意味では桂の神楽は、実に生き生きとしている。神楽は伝統的なものであるが決して古臭いものではない。宮本は一般的に古いものを大事にしている「伝統」という言葉を次のように展開する。すなわち、生活の伝統というものは、自分の生活をどのように守り、それを発展させていくのか、そのエネルギーそのものを指す。この発言は、たとえば青森を訪れた宮本が「ほんとうに辺鄙なところで」という地元の卑屈な挨拶に対する違和感をもったことを背景としている。

それに対して、宮本は歴史をひも解くことによって、私たちが想像する以上に、辺鄙だとされているところが、実は積極的な外来文化吸収し発信する地盤であったことを力説する。それは、地方が東京一色に染まっていくことではない。かといって地方のみで閉鎖的であるわけではない。遠くで起こったものを自分たちの生活のペースに合わせて作り直していった力がそもそも地域に備わっていたことを明らかにする。ひとりひとりが考え、自分たちの身にそれがどのような意味を持ち、どのように私たちの生活に貢献するかということを図って吸収していく、このことが伝統ではないかという指摘はたいへん貴重である。生活を組み替えていこうとする人々の意思そのものに、古くて新しい問題を見ることができる。

はじめにあげたいいわゆる「辺鄙な」村には、若い人がぼつりぼつりと流入してきている。なぜだろう

か？「地域おこし」といった性急な解答を求めるのではなく、まずはじっくりそこで何が起きているかについて確かな「眼」を養うことが求められているのではないだろうか。もし世間一般で「地域おこし」が求められていたとしたならば、なぜ今地域づくりが求められるようになったのかという問いに転換することで、もう一步深いところをみることができる。

本物を見極める学科が地域構想の本願であるところとらえるならば、ある意味において、地域構想とは、「一周遅れのトップランナー」である。一見地味にみえるが、しかし地域を深いところから鋭くまなざすことができる点において、ナウい学科であるだろう。

とりわけ、東日本大震災を間近で経験した我々にとって、地域構想が目指すものが間違っていなかったということがより旗幟鮮明となったといえよう。

社会を根底から破壊するような災禍にあってもなお、災禍を吸収するダイナミズムを私たちの社会は本来的に保持していることを示してくれた。すなわち、単に安全を求めるだけでなく災害のリスクを“引き受ける”しくみが地域に組み込まれている。生のみの安全基準を求める復興とは、災害に対して逆に弾力性と柔軟性を失わせ、社会を脆弱化することが透けて見えてくる。

三陸沿岸は、しばしば陸の孤島と称されるように、大都市圏からは周縁部にある。それらの地域は少子化や高齢化など日本共通の課題を抱えており、いずれ生じる問題が三〇年圧縮した形で早く到来したと言われている。そうだとするならば、被災地の三陸沿岸を地理的辺境と扱う開発論やコンパクトシティ構想や行政効率などの論調を横目にして、危機としての生を生き抜くための智慧が集積した文化的中心とおくことで、主体性ある社会変容の形成基盤とみることができるだろう。